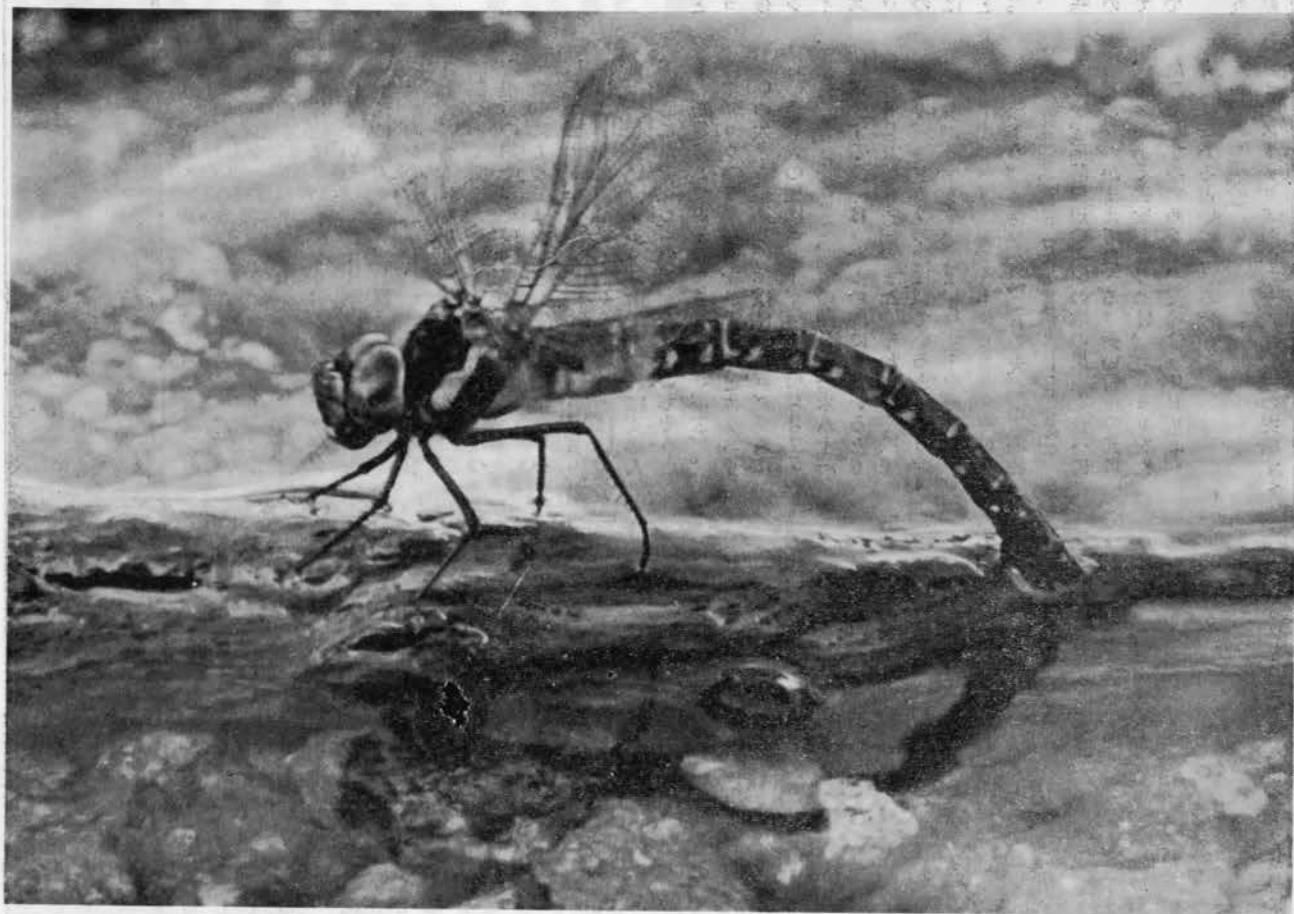


山と博物館

第12巻 第9号 1967年9月25日 大町山岳博物館



遭難におもう

ことしの夏山シーズンも、ようやく終りをつけた。北アルプスの玄関口信濃大町駅は連日、県内外の登山者で賑わいを見せていた。最近山奥深く自動車が入り、山頂近くまでケーブルが動き、三千メートルのアルプスの山々もいさゝか低くなった感じがしないでもない。しかし、この夏も数多くの遭難事故が伝えられた。私は、悲しい山の報せを聞くたびに、「山ではないぞえ岳だぞえ」今では亡き鹿島槍ヶ岳冷池小屋の柏原長寿翁のありし日の言葉を思い出す。

私が初めて北アルプスに登ったのは、七月初めの鹿島槍だった。雨にすぶぬれになって登った赤岩尾根だったが、十四歳の少年の心を山の何かがとらえたらしい。それ以来、毎年のように冷池小屋に爺をたずねたものだった。どうやら北アルプスの山々を、ひとり歩きできるようになっても、爺は逢うたびに「山ではないぞえ岳だぞえ」と、私の言葉を繰り返した。耳にタコが出来る程、聞いた言葉を、しみじみ肌で感じるようになったのは、ずっと後のことだった。

そして、その言葉は、そのまま私の山に対する信条となっている。

アカデミックな登山、計画性と科学性ある登山、レジャー的登山など、その可否はとあれ、山に登る人に欠けてならないのは、山に対する謙虚な人間性ではないだろうか。「山へ挑戦」「山との闘い」「山を征服」そんな言葉を、よく耳にする。そんな言葉を軽々しくいう前に、大自然のきびしさの中で、如何に一人の人間が小さく弱いものであるかを謙虚に考えるべきではないだろうか。

インスタント流行の昨今、山男もインスタント的なものが多くなった。山を知るには長い歳月がかかる。ひとつひとつの山行を謙虚にかえりみて、山を知る。そんな山男であって欲しい。「山ではないぞえ岳だぞえ」亡き爺の言葉を、もう一度かみしめて欲しいものだ。

(西沢要・広報おまち)

コウモリを食べる

宮尾 嶽雄

すべて清い鳥は食べることができる。
ただし、次のものは食べてはならない。
すなわち、はげわし、ひげわし、みさこ、黒とび、はやぶさ、とびの類。

各種のからすの類。
だちよう、夜たか、かもめ、たかの類
ふくろう、みみづく、むらさきばん、
ペリカン、はげたか、う、こうのとりの類。

また、すべて羽があつて這うものは汚れたものである。

それを食べてはならない。
すべて翼のある清いものは食べることができる。

(旧約聖書、申命記)

モーゼの教えでは、コウモリを不浄の鳥として食べることを禁じている。日本でも、コウモリを食料とした形跡は殆んどない。近畿地方の佐目洞から、七種の貝、イノシシ、シカ、カモシカ、アナグマ、タヌキ、カイヅカオオカミ、ワカヤマムササビ、ハタネズミ、モグラ、カワネズミ、とともに、ヤマコウモリが出土している。これは縄文時代晩期の遺跡とみられているが、このヤマコウモリは、はたして食料の残滓かどうか疑問であるという(酒詰伸男・日本縄文石器時代食料総説)。

ところが、東洋人やアフリカ人の間では、かなり広くコウモリが日常の食品として賞味されてきた。この地域には大型で、肉食性のオオコウモリ類が分布することにもよるのであるが、原因はそればかりでもないようである。

帯からオーストラリアまで、広い分布域をもっている。いろいろな種類の果実を食べ、時には果樹園を一夜で全滅させることもある。日中は樹木にぶら下って休んでいるが、その群の個体数はきわめて多く、この群をキャンプと呼んでいる。北部オーストラリアでは、三万二千匹に及ぶキャンプが観察されている。

セイロンの一部でも、オオコウモリは何千となく集合して棲息し、樹を被いかくすほどに群がって餌をたべており、一たび飛びたつと黒雲の如く、その羽音はものすごい。

地方によっては食品として価値があり、一匹三十五セントで売っている(Wroughton: 1915)。また、市場でコウモリのいぐばいづまった大きなカゴが目につく。これは支那人が持ちこんでくるもので、大変なごちそうとして尊重されている(Dodsworth, 1914)。

オオコウモリは翼をひろげるとクラスぐらいの大きさがあり、体重は一キログラムに近い。最大の種はニューギニアの *Pteropus neohibernicus* で、翼の開長は一米八十三センチに達する。味はウサギの肉に似ているとも(Tennent: 1861)、また、やわらかく風味があり、ニワトリの肉に似ているともいう。

ボルネオのマライ土人は *Bat pie* を好むし、ジャワやフィリピンでもオオコウモリの肉を賞味する。サモアではこれを天国の動物(Animal of the heavens=manu lagi)と呼び、部落周辺のパンの木の実を食べにくるのをつかまえて食べる。長い竹竿の先に、トゲのある板をしばりつけ、コウモリをたたきおとすのであるが、彼等はニワトリよりも美味であるといっている。

(Allen: 1939)
オーストラリア西部の土人は、果の実熟す

頃にやってくるオオコウモリを大歓迎し、木の下で火をもして煙ぜめにし、竹竿などでたたき殺す。このコウモリの肉は、海岸地方の土人にとって大変な恩恵で、乏しい食料の補いとなり、殆んど魚ばかりの食事に変化をもたらす。Mrs. Lance Rawson は白人の口にも合うようなコウモリの調理方法を考案し、その著書には次のようにのべている。『オオコウモリはとてもすぐれた食品です。触るのもいやらしく、いやなおいがしますが、翼をとり、皮をはいてしまえば、ブタ肉と区別がつかないでしょう。肉は切ってタマネギを



オオコウモリの分布域(点線で囲まれた地域にすむ)

さえ、各種の香料植物で味つけし、トロ火で二時間ほど煮ます。次にこれをパイ皿にとり、ペーストをかけます。カレーをかけたオオコウモリはブタ肉とちっとも変わりありません。果物の時期でないと味が落ちます。オオコウモリは、果物のない時期には、ノイチゴや木の葉などを食べるので、香りが悪いからです』(Allenより)

アフリカにもオオコウモリはいるが、これはあまり食べない。小型の食虫性の種は美味でなく、また大人の食物としてはあまりに小さすぎるのだが、子供は草屋根の下にひそむヒナコウモリ類をさがし取り、みつけるとあぶって、一口に食べてしまう。コウモリさがしは子供の大きな楽しみの一つだという。小型の肉食性のコウモリ (*Epomophorus* Rossetus) は時として土人のナベに入れられ、たしな食料の補いにされる。西アフリカでは、コウモリの住む洞窟は土人の財産として大切にされる (Murray: 1869)。

支那の山西地方に、ニワトリほどの大きさのコウモリがあり、支那人はこれをとても好むという記録があるが、山西はオオコウモリの分布域から北にはずれており、このコウモリは多分キタガシラコウモリ(一種)だったのだろう。

小型のコウモリは日本各地に多くの種類が住んでいるが、オオコウモリは口之永良部島、宝島、沖縄本島、南大東島、八重山諸島の石垣島、西表島、小浜島、鳩間島、与那国島などのみに分布が限られている。これらの島々でオオコウモリを食べる習慣があったかどうか筆者はまだ知らない。

所かわれば品かわる。で、食物の種類も地方によつてずいぶんちがう。その地方の自然環境と結びついていた習慣や宗教と食物の種類との間には深い関係がある筈で、そこに秘められた歴史的背景をえぐり出すことによって、思いもかけない事実が現れてくるかもしれないのである。(信州大学医学部解剖学教室)

高山蝶のゆくえ



坂田尚

自然と、そこに生きる小さな昆虫の世界にも、最近抗しきれぬ時の流れがあることを感じた。

今から十数年前までの上高地は蝶類にとっても、食草は豊かであり、また安らかな生棲地であったことはたしかである。

此の附近の高山蝶も近年急激に発展しつつある観光開発の犠牲となり、年毎に減少の一途をたどりつつある。

そして現在に至り根絶したものもある程度である。

私が上高地の高山蝶に少なからぬ興味を持ったのは、三十年程前からであった。

そのころ中学生だった私は、此の地をよく訪れたもので、ゼフリスの宝庫であった、島々谷から、上高地へ入るのには苦しい里程の山道であったが、自然界に舞交う美しい蝶の数々を採集しながらの登山は、また楽しみのつきない一日であった。

その当時小梨平から徳沢附近で、六月中旬

頃になると、高山蝶の珍品である、クモマツマキチョウをしばしば見かけることができたものである。

七月下旬から八月上旬にかけて、小梨平のキャンブ指定地一帯に数多くのミヤマシロチョウとウスバシロチョウがミヤマズミの樹間に舞い、またベニヒカゲやカラスシジミなどが、シシウドの花に群がり翅を休めていたものである。

また此の頃明神橋附近と徳沢の河原や陽あたりのよい山道までも、オオイチモンジの見事な群生が見られたものであり、この附近の河原で発生していた数多くのヤリガタケシジミを、そのころの私はそれが高山蝶であることを知らなかった位であった。

現在登山人口の増加と観光施設の発展で、かつて高山蝶の宝庫であった上高地周辺は、自然環境が汚染破壊されて数多くの高山蝶もまたいつのまにか、その姿を消してしまったのは残念なことと思う。

まづ小梨平では梓川ぞいに自生していたミヤマハタザオ、それにカラマツ林の周辺に群生していた、シロハノヘビノボラズなど、クモマツマキチョウやミヤマシロチョウの食草が、キャンブ指定地の拡張とバンガロー施設の敷地内にあったため、そのほとんどが根絶してしまったのは惜しいことである。

一昨年の七月三十日上高地バスターミナル附近で、ミヤマシロチョウ一頭を確認したがこれが私の知る最後の記録である。

そのあと、ベニヒカゲもその食草ミヤマカンスゲの根絶で、クモマツマキチョウとともに、此のあたりで採集された記録はない。

ウスバシロチョウも四年前に(メス)が一頭採集されたのみで、そのあとの発生をみないのは食草のエンゴサがやはり根絶しているためである。

そのほかの珍らしい例では、低地性のヒメギフチョウの少数が、五月下旬ごろ六百沢の針葉樹林帯に発生していたことであるが、食草のウスバサイシンが六百沢の氾濫で減少したせいか、近年その姿を見ることができなくなった。

現在上高地に残された高山蝶のうちでオオイチモンジ、ヤリガタケシジミもまた減少の一途をたどっているのは淋しい限りである。なぜならば最近これらの高山蝶の発生期をねらい多くの採集者が入山して、成虫はもとより食草についた卵から幼虫までも持ち去るからである。

また河川の氾濫で、タイツリオウギやオオイチモンジの食葉であるドロノキまでが水に流されて、この附近に少なくなったのも原因の一つである。

然し悲観すべきことはかりではない。

一昨年の六月明神岳最南峰登頂の際に、クモマツマキチョウの生棲地を上高地から、最も近い明神岳ワサビ沢に見出したことである。登り数キロの沢ぞい、ミヤマハタザオの自生地と、十数頭のクモマツマキチョウを確認

した。

その後ワサビ沢を再度訪れて、卵から幼虫三令の生育期まで見守り、ひそかに保護を続けてきた。【カット写真ワサビ沢】

昨年六月にNHKの「自然のアルバム」、高山蝶撮影のため、その一行を私は此の場所へ案内した。

そのときのクモマツマキチョウ撮影は成功であった、同行の田瀬行男氏も、上高地の一部に貴重な存在であるクモマツマキチョウの健在なさまを見て満足な様子であった。

同じく一昨年の七月明神岳東南尾根のカールに自生している、タイツリオウギとイワオオギの群生地を発見し、やはりこゝにもヤリガタケシジミが発生しているのを確認している。

また同地附近で八月中旬、下旬に数十頭の、ベニヒカゲの群生するのを見たがその数の多いこと、自然のままの姿は、かつて高山蝶の全盛期であった昔しを思い、よろこばしい限りであった。

島々谷から槍沢まで、昆虫学会員仲間知られたクモマツマキチョウの生棲地も、今は減少して見るかげもないが、こうした秘境にまだ残存しているこれらの高山蝶と、その自然環境を保護することこそ、滅びゆく高山蝶のためにも必要なことであると痛感するものである。(明科フイシユングランド)

ニホンザル入園

九月十五日高瀬入不動沢でニホンザル(オス)一頭が保護された。

保護したのは須藤文男氏。館ではさっそく今までいたメスザルと一緒に飼育することにした。

カモシカ冬のエサ作り

現在五頭飼育しているカモシカの冬のエサ作りがこのほど終了した。

コナラ、クリ、クズ、クワなどの葉を乾そうしたもので、一冬分三百斤が作られた。

信州植物寸景

横内 斎

(その八)

オニヒョウタンボク *Lonicera Vidalii* Franchet et Savatieri いかずら科 灌木。葉は楕円形か広卵形で質はうすい、上面は緑色、下面は淡緑色で中肋に粗毛をつける。上面は脚上に細毛がある、花は淡黄色で五月に開く、本州の越後、信濃と中国地方の山地に育つ、南朝鮮に分布する。これも大陸との共通種である、本県では北アルプス山麓の数ヶ所とこ菅平と東信の山地に見られる。

さてこの菅平の神川上流の湿原(合地)であるが、私が断片的に記したのをまとめてみると、エゾオオサンザシ(クロミサンザシ)と同一か)カラフトイバラ、シバタカエデ、ハナヒョウタンボク、クハビイタヤ、シキンカラマツ、オニヒョウタンボクなど稀重な存在だと言える、菅平で注目すべき他の植物といえ、ツキヌキノウとグンバイヅルであるが、この二種を除けば他の七種は、ここに一大群落を作っているわけである。このような重要な高い地を、もしも人工によつて破壊されるような事があれば、後来必ず悔を残した回復をすることは絶体にできないので、私は私の意見として、長野営林局長とその関係者に注意を促すと同時に、これを林野庁の学術保護参考林に加え、永久に保護するよう陳情した、これは苗場山頂の湿原も同じで、私は観光開発よりもまず自然保護を優先すべきだと考えている。

筆のついでだから見聞した事実を記すが、この八月月中旬も菅平を訪うて、ツキヌキノウの群落を見たがその一ヶ所は道路を広げた為に従来の数百株がそれ以上もあつた群落がみるも淋しく減つていた、またその近くの私有地に残る群落も昨午までは、まことに見事であつたが、植林をしたために、あわれなものになつて、もし前者は測溝を整え、後者は植えた木が成長するならば、どういふ結果になるだろう、真田町の中学校の帽章などはツキヌキノウを便化したものと聞く、このような状態に進んでゆけば、ついに天然記念物とは名ばかりで、その姿に接することはできなくなつてくる恐れが充分ある、また神川湿原の最下端の前で、この六月行った時には、ハナヒョウタンボクの見事な大木が全樹花をつけていたのに、これも道路工事のため無惨に伐られ、いたずらに枯れた枝葉と伐り株が残っているのみであつた、どこもかしこも自然保護とは名ばかりで、植物学上貴重なものが日々に失われてゆく、私は思う、前者の場合どこか適当な地を少し求めて、中学生か土地の人の勤勞奉仕にでもよつて移し植えて残して欲しい、後者の場合は土盛工事のさい枝打ぐらいにして、幹そのものは残して欲しい。また、まずこういう注意すべき場所を改変するには、その道の人に意見を聞くべきであるという事である。筆が横にそれて大変恐縮した、これも自然愛護からでた言葉としてすなおに受取つて欲しい、さて本題に戻る。

トガクシシヨウ *Ranzania japonica* It-。めぎ科 深山の樹陰地に出る多年草で、地下茎は横には強い根を出す、茎は高さ三〇cm内外、葉は二個で茎の上部に對生する、花后のびる、長い柄がある、三出複葉で、小葉はゆがんだ円心形、ふぞろいに浅く裂ける、両面無毛、花は淡紫色で六月に咲く、散戻状に三〜五個で下向きに開く、花弁は六、漿果はだ円形、わが国の特産で、戸隠山の樹陰下に採られたので、この名がある、トガクシヨウともいう、信濃では戸隠山に産したが、今はほとんどない、白馬岳の中腹には健在である、近頃上水内郡鬼無里村の国有林中に多産するのが見出された、私も二回この地を見ているが、荒される恐れがあるので産地は明かにできない、花時は清楚な感の草である。

フジザサ *Cirsium purpuratum* Mat-Sunura きく科 山中の河原やガレ地に生える剛直で壮大な多年草で、高さは五〇〜一〇〇cmにも達する、葉は基部に集まっている、白い毛がある頭花は甚だ大きく八〜一〇月頃に下向きに開く、総茎片は無毛で紫色を呈する、本州の関東から中部にかけて分布する、おそらくはフオッサマグナ地帯の要素であろう、本県では大地溝帯に添うて産し、下水内や下高井には産しない、一種の白花のものがありシロバナフジザサ *form. albidiflorum* Kitagawa といひ、本県では北安小谷村小谷温泉付近に産する。

エゾノミズタデ *Pescicaria amphibia* S. F. Gray var. *amurensis* Hara たぶ科 池や沼またはその周辺に生える多年草で、地下茎は地中を横立して枝を出す、水上に延びるものは五〜七cmにもおよぶ、毛がなく少し枝わかれする、私はかつて青森県下北半島の藤枝の堤で見たものは、実に見事であつた水上茎の葉は細長い楕円形で、上面にツヤがある、乾いて赤褐色をなし長さ五〜一五cm、側脈は多い、柄はやや長い、輪は膜質、花穂は腋生、円柱状で直立、密花、花色は深紅、漿果は黒色、北半球の温帯に分布する、本県では北海道と本州の陸奥と羽後等に産する、信州では早くから上水内郡若槻(現長野市)の田子池に知られて注目されていたが、一昨年の上水内教育会の飯綱高原の池に産するのをたしかめた。ここは池の北岸にあり、そこは崖となつており、水湿地で森林と雑草にとざされておる所だったので、今まで注意されなかつたものと思う、本種がかくも離れた地に隔離分布するのは、地史的な要因によるものか、それとも水鳥の移動によつて広がつたものか、非常に興味のある問題である、もし後者の場合すれば、羽後から信濃との間には、数多の池沼もあるのであるから、もう少し産地があつてもよいと思う。田子池の花の色は白い。

博物館だより

カモシカの名前決まる

今年に入り保護され飼育されていたカモシカの名前を募集いたしておりましたが、多くの方々からお寄せいただいたうちから、次のように名前が決まりました。

- なお、安曇郡沢渡で保護されたメスは9月1日肺炎のため死亡いたしました。
- (1)、高瀬川東葛温泉付近で保護されたもの 葛子
 - (2)、上高地で保護されたもの 上子
 - (3)、沢渡で保護されたもの 沢吉

名前をつけていただいた方々には命名されたカモシカの写真をはつたアルバムが贈られます。

お願い「山と博物館」の購読者をつつております。年間三〇〇円(送料共大町山岳博物館宛お送り下さい。(切手は不可))

表紙説明

産卵中のオオルリボシヤンマ(メス)

撮影 倉田 稔

山と博物館 第12巻第9号

一九六七年九月二十五日発行

発行所 長野県大町市T.E.L.(大町)二二一

印刷所 大町市下仲町 大町山岳博物館

大糸タイムス印刷部

定価 年額 三〇〇円(送料共)